

シンポジウム報告

1. 南山宗教文化研究所創立 40 周年記念シンポジウム 「宗教研究の拠点形成をめぐる課題と展望」

日沖直子

HIOKI Naoko

2014 年 11 月 8 日、南山宗教文化研究所（以下、研究所）創立 40 周年記念シンポジウムが、研究所 1 階の会議室で外部の参加者を交え 25 名余りが集い開催された。シンポジウムでは、長年にわたる研究所の活動、日本宗教研究への貢献を再確認するとともに、国内の人文系研究機関の中でも特筆すべき国際性と研究者育成の場としての重要性に評価が与えられた。さらには今後の課題について問題提起があり、活発な議論が交わされた。

まず最初に、ミカエル・カルマノ学長による開会の挨拶が述べられた。カルマノ氏は世俗化社会の宗教嫌いの傾向が続く中で、研究所が宗教研究と宗教間対話をさらに推進していくことを期待し、また、このシンポジウムが過去 40 年間の「旅」の到着点を確認し、今後の目的地を考える良い機会となるようにと語った。

続いて奥山倫明所長が、25 周年記念シンポジウムが開催された 1999 年以降の研究所の活動について話し、南山大学の国際化推進事業やテンプレート財団の協力による研究プロジェクト、諸宗教研究講座、海外の大学院生を招聘して 2013 年に開かれた日本宗教研究セミナー、研究所の出版事業などの成果と進行状況について紹介した。

次に、青山玄・南山大学名誉教授が「ローマと

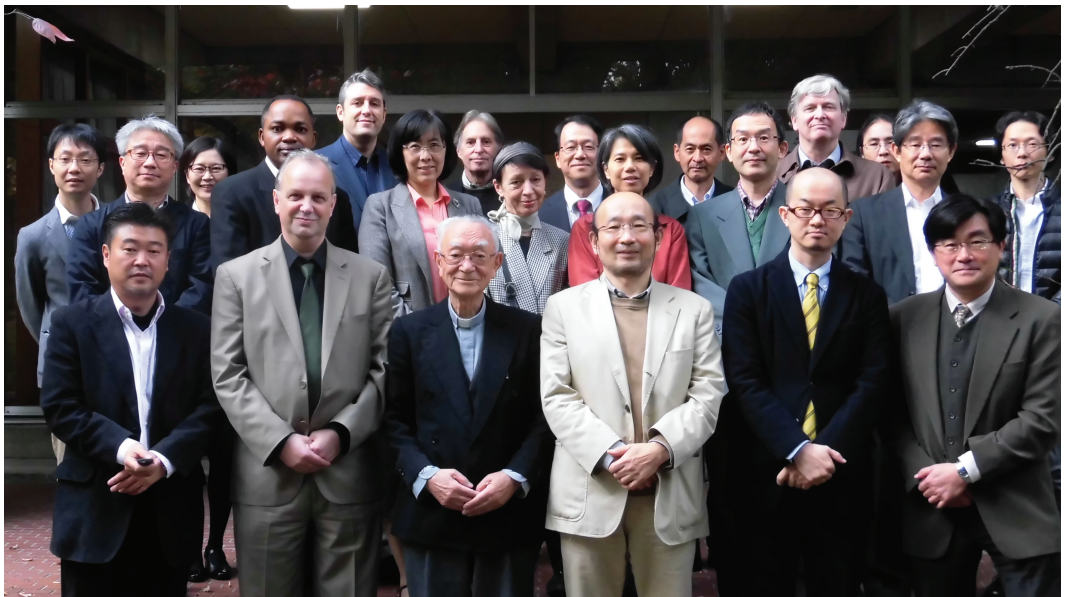
ネミで私の見聞きしてきた第二ヴァチカン公会議とその後のカトリック教会の動向」と題して特別講演を行った。青山氏の講演の中心は、わずか 5 年の在位期間中に第二ヴァチカン公会議の開催にこぎつけ、20 世紀におけるカトリック教会のありかたを大転換することに成功した、ローマ教皇ヨハネ 23 世の生涯についてであった。イタリアの小作農の家に生まれたアンジェロ・ジョゼッペ・ロンカッリが、20 世紀前半の世界の動乱のさなか、ローマの大神学校から進歩・改革派司教の秘書、教皇巡察使、教皇大使、枢機卿と出世の階段を着々と上る途中で直面した教会と世俗社会との乖離・対立、教会と政治、教会の一致、などの問題を案じ、熟慮した結果、1958 年の教皇就任後、ヴァチカン公会議を開きたいと公言し、実施にこぎつけるに至った過程が語られた。ヨハネ 23 世の死後、パウロ 6 世によって引き継がれた第二ヴァチカン公会議はキリストを、全人類を照らす「世の光 (Lumen Gentium)」とし、教会を「旅する教会 (Pilgrim Church)」であるとしたが、それは、光が四方八方を照らすように、どの宗教にも神がはたらいているという、世界への呼びかけであったと青山氏は語った。また、第二ヴァチカン公会議には各国のプロテスタント神学者がオブザーバーとして参加したが、公会議後、そのエキュメニズム精神が引き継がれ、日本で結実したのが、南山宗教文化研究所や、オリエンズ宗教研究所、NCC 研究所の功績に代表される宗教研究と宗教間対話に関する活動だということが指摘された。

その後、休憩と写真撮影をはさみ、「南山宗教文化研究所の活動をどう見るか」というテーマについて、山中弘・筑波大学教授、ゲレオン・コプフ(Gereon Kopf)・ルーサーカレッジ教授、大谷栄一・佛教大学准教授の3氏による講演があった。

まず、最初に山中氏が日本の宗教研究における研究所の位置について所感をのべた。山中氏は現在、現代宗教論を主な研究課題としているが、1975年、筑波大学の大学院生時代に、当時筑波大学の非常勤講師であった(故)ヤン・スインゲドー氏に出会い、ルックマンの『見えない宗教』と世俗化論について見識を深めるようになったこと、また、スインゲドー氏との親交を通して、プロテスタント的なイメージに偏りがちだった山中氏自身のキリスト教観が変化したと思い出を語った。山中氏は現在の研究所の印象について、以前と比較すると経験科学的宗教研究よりも宗教思想研究に力を入れている印象が強いこと、そして地道な研究の蓄積があるにもかかわらず、研究所があまり目立たないように思うのは、東京と関西圏の間にある名古屋という位置が関係あるのではないか、と意見を述べた。さらに、大学における宗教

研究の「生き残り」の難しさが問題となるなかで、研究所のように宗教に特化した研究機関の重要性がさらに増していることを語り、研究所が創立以来長年にわたり日本人研究者と外国人研究者の交流拠点となっていることを評価したうえで、滞在する海外の研究者の研究成果が日本の学界であまり公開されておらず、海外学術交流が、研究所内で完結してしまっているのではないかと、ということを指摘した。

続いて、コプフ氏が研究所の国際学術交流について、特に、日本宗教学と日本哲学の分野での研究所の国際学界への貢献について語った。海外から10回以上研究所を訪れ、のべ3年にもわたる滞在研究を重ねてきたコプフ氏にとって、学術コミュニティとしての研究所とパウルスハイムは非常に重要な意見交換と思索の場であり、また、コプフ氏自身も翻訳に関わった *Japanese Philosophy: A Sourcebook* をはじめとする数多くの出版物、オンライン上でオープンアクセスとなっているJJRSや日本の宗教に関する写真集の意義を強調した。さらにコプフ氏は「文化的イデオロム」の差異と分断が文化と文化の間に緊張と



対立を生み、哲学がグローバルとローカルの間の緊張にいわば捕らえられている現状にあって、ジェームズ・ハイジック南山大学名誉教授が著作 *Nothingness and Desire* でとりあげた、東西の *antiphony* を対話と調和へと導き「イディオムの翻訳」を可能にする場所がこの研究所ではないだろうか、と述べた。

休憩をはさんだ後、大谷氏が宗教研究の拠点形成、特に研究者育成に関する課題について語った。まず、大谷氏自らを含む研究所の歴代研究員について言及し、「修道院」の例えを使い、諸々の雑事を離れ研究に専念できる場所としての研究所と、研究者集団であるだけでなく編集者集団でもあるその構成員の実務の効率性を評価した。また、宗教研究の拠点としての研究所の役割として、国内の日本宗教研究者の「再生産」の場所であること、日本人研究者にとっては海外の研究者との交流の場であり、研究成果の海外への発信拠点であることをあげ、さらなる発展に向けて、研究員制度の継続、研究員OB・OGのネットワーク作り、共同研究プロジェクト、研究成果をAARなど海外の学会で発表すること、などを積極的に進めることを今後の期待として語った。

これらの発表をふまえ、奥山氏と発表者からのコメントがあった。まず、奥山氏が、研究員制度の継続とOB・OG交流をはかるための小規模ワークショップの開催、昨年の南山セミナーに類する、海外在住の大学院生のための日本宗教セミナーの実施に向けて尽力していることを伝えた。山中氏とコブフ氏からは、日本の宗教研究が曲がり角にきているという自覚の中、研究所の国際交流の場としての重要性が増していることが続けて語られ、また、大谷氏からは大学の学部生にたいする宗教教育のありかたを再考、論議する必要があるのではないかと指摘があった。

続いて、研究所の現・前第一種研究員からのコメントがあり、ハイジック氏から研究所の「対話」の理念をどのように継続していくのか、という

課題が挙げられた。それに対し、金承哲教授が東西宗教交流学会について、若手がいってこない、若手がいりにくい雰囲気がある、と指摘した。また、スワンソン教授からは、研究所のロケーションについて、名古屋という中心から離れている場所にあることの利点、とくに、研究に集中できる環境であること、そして「避難所」としての役割も重要であろうとのコメントが述べられた。

その後、参加者全員による質疑応答に進み、宗教間対話のありかたについての問題、また後継者育成について、議論が交わされた。宗教間対話については、研究所の創立趣旨の背景に世俗化への危機感があり、宗教間対話を推進するとともに、宗教と文化がともに世俗化の砂漠を乗り越えるという考えがあったこと、しかしながら、現在、宗教間対話がいきつまり、宗教は個人的な趣味であるという考えが敷衍する一方で、宗教と政治の問題がはるかに緊急で切実な課題としてクローズアップされていることが指摘された。それに対して、宗教間対話に学問的成果や目だった進展を求めることが困難であるからといって、対話をやめてしまうのではなく、継続することに意義があること、第二ヴァチカン公会議後に高まっていた開かれた教会への期待、護教・宣教論から対話へのシフト、故スインゲドー氏の対話についての確信などがあらためて想起された。研究所の将来については、先に挙げられた研究者・編集者集団としての卓越した業績が、所員各人の個人的手腕によるものであり、研究所全体として今後も変わりなく、あるいは今まで以上の業績を積み上げていくには、それなりの制度を整えて後継者に継承していく必要があるのではないか、という意見があった。

その他、質疑応答では海外との交流の場としての重要性が再度強調され、外国人研究者との交流だけでなく、国内の大学院出身者と海外で大学院教育を受けた日本人研究者が共に研鑽を積み「再生産」されていく場を提供すること、そ

して、出版事業のさらなる展開についての期待が述べられた。世俗化については、宗教だけでなく、世俗もまた変わりつつあることが指摘され、最後に、東北大学からの参加者が、震災後の東北における世俗と宗教のありかたに触れ、未曾有の災害にみまわれたことにより、世俗化・機械化した社会の中に「本当に宗教が必要な場」が突然できたこと、そして、かつてのマイナスイメージではない宗教の姿が少しずつ、人々とともに育ってきているのではないか、という見解を述べた。

以上で、4時間半にわたるプログラムの全てが

予定通り終了した。研究所との関わりにおいて新旧さまざまな参加者が集い、ともに研究所の過去・現在・未来について真剣な討論を重ねただけでなく、「世俗化」といった今後の日本の宗教研究において再考が必須なキーワードが浮上した。このように、40周年の節目における、半日の議論の成果が、研究所の運営だけでなく、参加者それぞれの今後の研究活動に具体的な影響を与えていくであろうと思われる、大変有意義なシンポジウムであった。

ひおき・なおこ
南山宗教文化研究所客員研究所員